



日本GAP協会の会報誌「MONTHLY-J」が「JGAP+」にリニューアルいたしました。
JGAPがきっかけとなり、新しい人と人の出会い、新しい農産物の流通、
新しい農業ビジネスモデルの構築が各地で始まっています。
「JGAP、そしてその先へ」をテーマに、最前線をお伝えしていきます。

JGAPとは……

JGAPは、食の安全や環境保全に取り組む農場に与えられる認証です。JGAPは、農場やJA等の生産者団体が活用する農場・団体管理の基準であり、認証制度です。農林水産省が導入を推奨する農業生産工程管理手法の1つです。

J G A P T O P I C S JGAPトピックス

ウクライナ訪日団が日本GAP協会を親善訪問



2月9日、ウクライナ訪日団が日本GAP協会を訪問し、意見交換会を行った。日本GAP協会側も専門的知識を有する技術系メンバーが対応した。ウクライナの訪日団はチェルノブイリ原発事故で石棺化プロジェクトの責任者だったアレクサンドル・クリュチニコフ氏(原子力学会会長 原発安全問題研究所 所長)やウクライナの放射能検査の第一人者であるアレクサンドル・カジミーロフ氏(原発安全問題研究所 放射線機器部門長・食品担当)ら5名。

JGAP+GとGLOBALGAPの同等性認証、最終段階へ



2月21日、GLOBALGAPからも担当者が来日し、関東のJGAP認証農場でOn-site Equivalence Assessment(GAP+GとGLOBAL GAPの同等性認証について、農業現場で模擬審査しながら確認するプロセス)を行なった。これについては大きな問題もなく、高い評価を得ることができた。これにより、かねてより進めてきたJGAP+GとGLOBAL GAPの同等性認証のプロセスが最終段階に進んだ。

宮崎大学農学部附属農場 JGAP認証取得記念シンポジウム開催

2月29日、宮崎大学農学部附属フィールド科学教育センター木花フィールド(農場)がJGAP認証を取得したことを記念して、GAP教育プログラムについて考えるシンポジウムが開催された。基調報告のほか、『GAP 指導者をどう養成するか』をテーマに、大野和朗氏(宮崎大学准教授)らが活発な議論を交わした。

技術委員会・第6回 穀物部会の開催

3月12日、技術委員会・第6回穀物部会を開催し、JGAP2012の開発を行った。議題はJGAP2012の特徴である精米工程の部分の審議、およびコメのトレーサビリティ、小麦・大豆・ソバへの適用について。

東京大学大学院で JGAPの講義

4月10日、東京大学大学院農学生命科学研究科において「JGAPと世界のGAP—農産物の安全性に関する新たな世界基準とグローバル競争時代における選ばれる産地づくり」をテーマに、武田泰明・日本GAP協会事務局長が講義を行った。本講義は「食品安全最前線ゼミ」の一貫として実施された。

今月の新規会員ご紹介

- (株)サードウェーブ(東京都千代田区・放射線測定器、防護服等の製品開発)..... <http://www.envsafe.jp/>
- ANAロジスティクスサービス(株)(東京都大田区・航空貨物・郵便の取扱業)..... <http://www.als.ana-g.com/>
- (株)叶 匠壽庵(滋賀県大津市・和洋菓子の製造・販売)..... <http://www.kanou.com/>
- 一般社団法人アグリフューチャー・ジャパン(東京都千代田区・農業経営者の育成事業)..... <http://www.afj.or.jp/>

この春、新たに日本GAP協会の会員になってくださった皆さまです。誠にありがとうございます。
今後とも日本GAP協会をご支援賜りますようお願い申し上げます。

JGAPキーパーソン・インタビュー

橋本省三

Shozo Hasimoto

JGAP上級審査員/
パリエル クロップサイエンス(株)
アドバイザー

これまでの3年間で約130の農場の審査・指導を行っている、
JGAP上級審査員・橋本省三氏。農業業界唯一の審査員資格所持者でもある氏は
「農業業界はまだGAPをよく理解していないのでは」と話す。
社会において農業業界が果たすべき役割と、
JGAPの普及はどのように関係があるのか。話を聞いた。

JGAP普及に貢献することで、
農業業界に課された社会的責務を果たしていきたい



はしもと・しょうぞう

1948年東京都生まれ。明治学院大学文学部英文学科卒業後、日本チバガイギー(株)に入社。輸出入業務やプロダクトマネジメントなどに携わる。2000年パリエル クロップサイエンス(株)に移る。定年退職後の現在はアドバイザーとしてマーケティング部に所属。2008年JGAP上級審査員資格を取得し、(株)北海道GAP認証センターと契約。趣味は釣り、ジョギング等。

生産者の意識が「やらなきゃまずい!」に変化

——橋本さんが、JGAP審査員になったきっかけは?

当時、私は農業メーカーの社員だったのですが、JGAPという新しい農場管理の手法があること、そしてその全国的な普及を目指して日本GAP協会が発足したことを聞きました。生産者および消費者に農業について正しい理解を深めてもらうことが私の仕事のひとつということもあり、関心を持つようになりました。それで4年前、指導員研修を受けJGAP指導員資格を得たのが始まりです。

ただ、指導員資格を得たのはいいものの、私自身はGAPという手法について今ひとつ理解できなかったところがありました。もちろん、必要性といったような理屈については頭で理解できるんです。しかしGAPの全体像や、農場という現場においてどうしたらいいかといったことについては、今ひとつピンと来なかった。それで「これではまずい、本腰を入れて取り組まなければいけない」と思いまして、審査員資格を取ることにしました。

——これまでどのぐらいの農場の指導・審査を行ってきましたか?

審査だけですと、約110の農場です。またJGAPを導入しようと考えている農場に対するコンサルティング業務も行っているんで、それを含めると130ぐらいにはなるのかもしれませんが。

——現場でJGAPの指導・審査をやっている、農場の反応・取り組み姿勢はどう変わってきたと感じますか?

農場のJGAP認証取得を流通側が求めていることもあって、取らなければいけないと思っている農場は明らかに増えてきたのではないのでしょうか。特に、昨年(2011年)の東日本大震災以降は、その思いを強くします。それまでは「JGAP? 聞いたことがあるけどやらなくてもいいんでしょ?」という意識が「やらなきゃまずい!」に変わってきたのでしょう。もちろん、団体認証で、事務

局が積極的なのに農場は消極的というケースは今もあります。それでもGAPという言葉自体が生産者に認知されつつあることもあり、以前よりも理解してもらえる環境になっていると感じています。

指導員・審査員の層を手厚くする必要あり

——農業メーカーの社員が、JGAP指導・審査を行う意味について、橋本さんはどう思っていますか?

生産者および消費者に対して、農業の安全性を啓蒙する活動を行うのは、農業メーカーに課された社会的責務ではないでしょうか。農業業界に40年間身を置いてきた私も、一個人としてその役割を果たさなければいけない、いわばライフワークとして考えています。そういう立場の人間が、農業の適切な管理方法や使用方法を定めたJGAPの普及に関わっていくことはとても有意義なことでもあるし、誤解が生じている農業について正しい理解を深めてもらう上でも有効なツール、指標になるはずなんです。

しかし、業界の一部には「JGAPは農業を使わせないようにしている手法なのではないか」という思い込み、偏見をお持ちの方もいるようです。そのためでしょうか、農業メーカーに在籍しながらJGAP審査員資格を持っているのは私だけ、という現状があります。JGAPが普及することは農業業界にとっても大きなメリットがあるということ、よく知ってほしいと思います。

——さらなるJGAPの普及のために、どんなことが必要と考えていますか?

食の安全・安心への関心の高まりから「JGAP認証を取得したい」という農場が増えているのは事実です。でも「認証を取る方法が分からない」というニーズに応えきれていないと思います。具体的に言うと、指導・審査員、あるいはコンサルタントの数がまだまだ足りないのでは。今後もJGAPを導入したい農場が増えていくことは間違いないので、その要望にきちんと応えられるように、関連業界こそぎって取り組んでいく必要があると思っています。

事務局長
編集後記

日本GAP協会事務局長の武田です。会員の皆様にお支え頂き、日本GAP協会も第7期に入りました。思い返せば、日本GAP協会を立ち上げた当時は、東京・秋葉原の雑居ビルからスタートでした。中古の事務机やコピー機を探すところから始まりました。文字通りのゼロからのスタートでした。

今や会員は320社を超え、全国に1700もの認証農場が誕生しました。「GAPは信頼できる農場・産地の目印でなくてはならない。バラバラのGAPでは農業界も流通業界も困る。日本の農業の競争力に寄与するGAP普及であるためには、世界的にもレベルの高いGAPではあるべきだし、業界標準のGAPが必要だ」——。6年間、このような思いを伝え続けてきました。多くの方にご賛同頂き、JGAPは第二ステージに向かいます。そのような意味を込めて、会報誌「JGAP+」をスタートします。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。(武田泰明)